

兵庫県立 考古博物館 NEWS

vol.34



Hyogo Prefectural
Museum of
Archaeology



2024 Autumn - Winter

2024年 秋冬号

- 秋季特別展「うつりゆく甲と冑—弥生から江戸へ—」
- 冬季企画展「弥生の墓—玉津田中遺跡の方形周溝墓—」
- 台湾の十三行博物館に行ってきました！～動物考古学がつなぐ日台交流～
- 古代鏡展示館秋季企画展「龍虎の鏡」

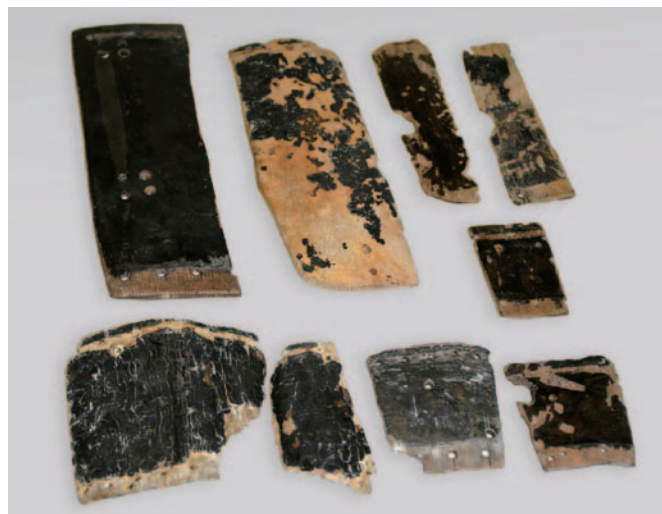
秋季特別展

うつりゆく甲と冑—弥生から江戸へ—

令和6年9月14日(土)～11月24日(日)

日本では、弥生時代の中頃以降に集団間の争いが激化したと考えられています。その中で、人々は、身を守るための甲(よろい)や冑(かぶと)を作り出しました。甲冑は戦い方の変化や技術の進歩に合わせて、機能性や生産性を向上させていくとともに、煌びやかな金具や色彩豊かな紐、織物など、装飾性を高め、日本独自のものへと変化していきました。本展覧会では、甲冑の変遷を大きく3つの段階に分け、その移り変わりについて紹介します。

甲や冑が作られ始めた弥生時代は鉄製のものはまだ無く、木などの簡単に手に入り、加工が容易で丈夫な素材で作られていました。岡山県岡山市に位置する南方遺跡では、集落の周りの溝から、表面に黒漆が塗られた木甲や鍬(やじり)が刺さった楯が出土しました。戦乱が身近に迫る当時の状況を生々しく物語ります。



木甲(岡山県岡山市・南方遺跡・岡山市教育委員会蔵)

古墳時代に入ると鉄の加工技術が発展し、帯状の鉄板でフレームをつくり、その間を鉄板で埋める構造の「帯金式(おびがねしき)甲冑」が成立します。この甲冑は東北から九州まで、広範囲に分布することから、王権の中核であった畿内で生産され、各地の首長に配られたと考えられています。県内においても、雲部車

塚古墳(丹波篠山市)や茶すり山古墳(朝来市)などで、複数の甲冑が発見されており、当時の王権にとって「ひょうご」が重要な地域であったことが想定できます。



三角板革綴襟付短甲・三角板革綴衝角付冑・
長方板革綴短甲・頸甲・肩甲・縦刻板鉾留衝角付冑
(朝来市・茶すり山古墳・朝来市教育委員会蔵)【国指定重要文化財】

弥生時代以来、日本では短甲(たんこう)と呼ばれるベスト状の甲が作られていましたが、帯金式甲冑の成立にやや遅れて、小さな鉄板、小札(こさね)を紐で繋ぐ挂甲(けいこう)が大陸から伝わります。この甲は可動性に優れ、同時期に伝わった騎馬にも適することから、次第に短甲にとって代わっていきました。

奈良時代になると、全形が残る甲冑の出土例はみられなくなりますが、平城宮跡などから、鉄製の小札が出土しており、引き続き挂甲が使われていたと考えられます。



小札
(奈良県奈良市・平城宮跡・奈良文化財研究所蔵)

平安時代の中頃には、武士が現れました。当時の甲冑には大鎧(おおよろい)や腹巻(はらまき)、胴丸(どうまる)があります。いずれも小札を繋いだ構造で、挂甲を発展させたものです。また、冑は大きな鋸で鉄板を留めた星兜(ほしかぶと)が使われます。これも古墳時代に使われた衝角付冑(しょうかくつきかぶと)が変化



鉄五枚張星兜鉢
(徳島県藍住町・伝小塚出土・藍住町教育委員会蔵)
【町指定文化財】

したものと考えられ、武装の伝統が連続と引き継がれていたことが分かります。

武士たちが着用した甲冑は、その戦い方の変化に合わせ、次第に変化していきます。馬に乗り、矢を射掛けあう戦闘方法が主であった平安時代～鎌倉時代には、重厚で弓を射るのに適した大鎧が、刀による戦いが多くなった南北朝時代以降には、軽量で動きやすい腹巻

や胴丸が主となります。さらに、室町時代末期には、全国に戦乱が広がり、戦闘に参加する人員が増加するに伴い、甲冑の需要も増し、当世具足(とうせいぐそく)と呼ばれる甲冑の一群が生み出されます。当世具足には非常に多様な形態がみられますが、防御性に優れ、大量生産に向いた特徴を持ちます。

江戸時代に入ると平和な時代が到来し、甲冑の実用的な役割が失われたことで、構造的な発展は終わりを迎え、以降は自身の家格や武威を示すものとして、装飾性を高めていくこととなるのです。



緋威金小札二枚胴具足
(六十二間筋兜付)
(県立歴史博物館蔵)

学芸課 渡瀬 健太

担当 学芸員 紹介



学芸課の渡瀬健太です。今回の展覧会は日本の甲や冑がどのように変化してきたかという点に注目して企画をしました。各時期の甲冑を一堂に並べてみますと、全く異なっているように見えるものにも、共通性や連続性を感じていただけるかと思います。

また、甲冑は戦争に使われる道具ですが、いつの時代も華やかな装飾が施され、見る者を引き付ける魅力が感じられます。それは甲冑が作られ始めた時から一貫していました。展示を通して、戦乱の中で当時の人々が甲冑に込めた思いについても、思いを巡らせていただければ幸いです。

今回の展覧会では、普段なかなか目にすることのできない貴重な資料を数多くお借りすることができました。その中には、久々に兵庫県に「里帰り」した資料もございます。この機会に、皆様ぜひお楽しみください。

冬季企画展

弥生の墓—玉津田中遺跡の方形周溝墓—

令和7年1月18日(土)～3月16日(日)

神戸市西区にある玉津田中遺跡は、明石川の氾濫に何度も遭いながら微地形の変化に順応した人々の生活が縄文時代から中世にかけて継続されました。特に弥生時代中期は大規模な洪水砂礫に覆われたことによって居住域・墓域・生産域が良好に残っており、弥生時代のムラの様子が復元できます。このうち墓域は木棺を埋葬施設とする方形周溝墓で、安定したムラの発展に伴い群を形成しています。

供えられた土器は、形や胎土の違いを見ると他地域のものが含まれています。木棺内からは銅剣の先が刺さった人骨や、石鏃、管玉が見つかったものもあります。

本展では、玉津田中遺跡から出土した木棺や供えられた土器を展示するとともに、最新の調査研究成果から、弥生時代の社会状況や交流の一端を紹介します。



人骨が残る木棺墓群(神戸市西区玉津田中遺跡)

学芸課 篠宮 正

台湾の十三行博物館に行ってきました！ ～動物考古学がつなぐ日台交流～

場所：新北市十三行博物館
令和6年4月18日～21日



1 新北市十三行博物館との交流

当館と台湾の新北市十三行博物館とは平成24年から交流があり、その後学術文化交流協定を締結しています。ここ数年はコロナ禍により、オンラインでの交流を行っていましたが、令和5年度から再び対面で台湾にて行われる国際考古学フォーラム、古代体験イベントに参加しています。

令和6年度は4月18日～21日の4日間、十三行博物館に出張し、「新北市国際考古論壇（国際考古学フォーラム）」ならびに「新北考古生活節（古代体験イベント）」に参加・出展をしました。



2 新北市国際考古論壇での発表

今回の新北市国際考古論壇のテーマは、「動物と考古学」でした。日本（山梨県・兵庫県・宮崎県）や韓国の博物館等9団体が台湾に集まり、発表をしました。

当館の渡瀬学芸員は、発掘調査でわかる動物の資料について、①遺跡で見つかった動物とその痕跡（食用となった獣や魚の骨、貝殻など）、②動物利用のための道具（ナウマンゾウを狩るための石器など）、③動物モチーフの造形物（水鳥形埴輪など）の3種類があることを紹介しました。

それらを踏まえて、当館では兵庫県で出土した①～③の資料を、ジオラマ展示や体験メニューに活用していることを報告しました。

また、ひょうごの先人が動物とどのように関わっていたのかを発表、その後は他館の発表を聞き、質疑応答・意見交換を行い、国際交流を図りました。

3 新北考古生活節へ古代体験のブースを出展

今年の新北考古生活節では、「動物パーティー」と題して、台湾内外の博物館・大学等の団体が、動物に係る体験ブースを出展しました。

当館は「木簡に十二支をひらがなで書こう」と題して出展しました。これは、古代に荷札や文書、記録に用いられた木簡をイメージした木札に、筆ペンで十二支を記入してもらう体験です。ひらがな（日本語）を記入することで、台湾の方に日本の文字を紹介しました。

台湾と日本では共に十二支があること、台湾の十二支でブタに相当する動物が日本ではイノシシに当たることに、台湾の方は大変驚いた様子でした。

日本の文字である“ひらがな”を扱い、古代日本の木簡について説明したことで、日本に興味がある、日本文化を学びたいといった台湾の方々のニーズに応えることができました！



学習支援課 野島悠之



古代鏡展示館秋季企画展

龍虎の鏡

令和6年9月14日(土)～令和7年3月9日(日)

想像上の生物である「龍」と実在する動物の「虎」を組み合わせた「龍虎(りゅうこ)」の図像は、古くから絵画や器物等に数多く表され、モチーフや表現として現在も色褪せません。漢時代[紀元前202年～紀元220年]の銅鏡には、龍と虎は瑞獣(ずいじゅう)のひとつとして登場し、青龍と白虎の組み合わせは辟邪(へきじゃ)(魔除け)の効果をもたらす図像として表されます。鏡の紋様が当時の思想を背景に制作されていくなかで、「龍虎」の図像は様々な姿をみせていきます。

本展では、当館の所蔵鏡のうち龍と虎の図像が組み合わされた作品を中心に上げ、鏡における龍虎の様々な表現とその関連文化について紹介します。本稿では3点の鏡を取り上げます。

獣帯鏡(じゅうたいきょう)【前漢】(図1)

主紋部分の4つの区画に瑞獣の龍と虎の図像を交互に配置し、龍の前方に仙人、虎の前方には山羊がそれぞれ表されています。

盤龍鏡(ばんりゅうきょう)【後漢】(図2)

鈕座の周りに、対向する龍と虎を浮彫で表す盤龍紋を主紋とした鏡です。虎の頭は左上に、龍は右上に1本角の頭があり、右下の山羊を除く部分には鱗のついた龍の体部と手足を表します。迫力ある龍虎を表現したこの鏡は本展のポスターを飾ります。

盤龍鏡【後漢】(図3)

同じく主紋は対向する龍虎です。鈕の下方には山羊と仙人が一緒に表され、図1との共通点や龍虎との関係は興味を引きます。「青蓋(せいしょう)」は鏡の制作工房の名称で、施された文字から鏡づくりへの自負が伝わってきます。

古代鏡展示館 垣内 拓郎

休館日：水曜日、2024年12月20日(金)～2025年1月3日(金)
※10月20日(日)～11月24日(日)は開館
場所：兵庫県立考古博物館加西分館「古代鏡展示館」



図1 獣帯鏡【前漢】
画像一部抜粋・調整、加筆

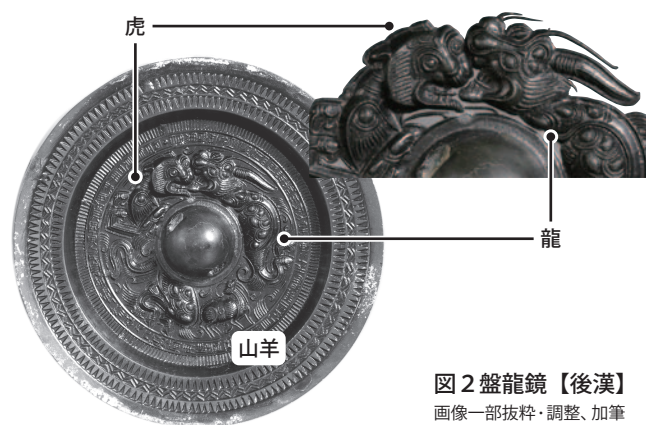


図2 盤龍鏡【後漢】
画像一部抜粋・調整、加筆

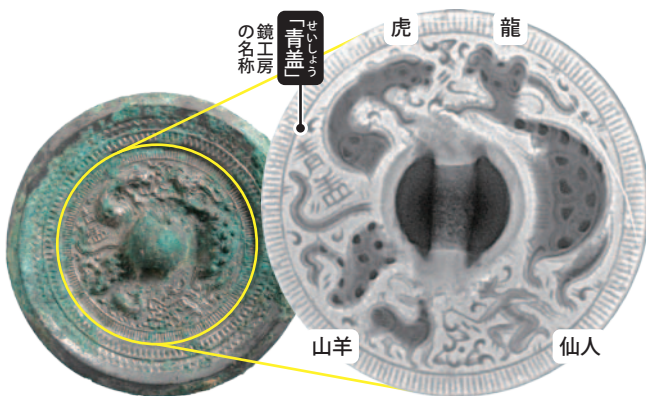


図3 盤龍鏡【後漢】

右図：X線反転画像、画像一部抜粋・調整、加筆

触れる・体感する、考古学のワンダーランド。
兵庫県立考古博物館
Hyogo Prefectural Museum of Archaeology

休館日：月曜日 祝休日の場合は翌平日

〒675-0142
兵庫県加古郡播磨町大中
1-1-1

TEL.079-437-5589

FAX.079-437-5599



考古博web

兵庫県立考古博物館 加西分館
古代鏡展示館
Hyogo Prefectural Museum of Ancient Bronze Mirrors

休館日：水曜日 祝休日の場合は翌平日

〒679-0106
兵庫県加西市豊倉町飯森1282-1
兵庫県立フラワーセンター内

TEL.0790-47-2212

FAX.0790-47-2213



加西分館web

兵庫県立考古博物館NEWS
vol.34 2024 Autumn・Winter

発行年月日 令和6年8月31日

編集・発行 兵庫県立考古博物館

〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中 1-1-1

TEL.079-437-5589

FAX.079-437-5599

<http://www.hyogo-koukohaku.jp/>